

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
分	フン・フ、 ブン・わか つ・わか れる・わか れる・わか ける								
刊	カン きる けずる								
刑	ケイ のり								
列	レツ つらなる つらなる								

【分】この字の「刀」は南北朝期あたり書き順と字体が変わる。草書の書き方の影響を行書、楷書が受けたのだろうか。その字体は干禄字書で〈通〉とされている。この字は文字通り分けるのだから、本来、上部の屋根がくっついてはいけない。くっつく字体は江戸に現れる。そのいけない字体を漱石

が踏襲しているが、同時に草書の字体も使っている。  
【刊】唐代に偏の縦線を左に払う字形が現れる。五経文字の江戸期の版本も偏の縦線を左に払っており、拓本の五経文字とは異なる。  
【刑】書道字典には「刑」と「井+リ」を別字としているもの

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考

と、異体字としているものがある。本書では後者の説を採用した。ちなみに説文も、康熙字典も別字としている。説文篆文の偏が「井」の字体は他に見えない。

※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
初	ショウ うい・そめ る・はじめて はつ・うぶ								
判	ハン ハン わける								
別	ベツ わかれる								
利	リ きく すどい								
券	ケン わりふ								
刻	コク きざむ とき								

【初】南北朝から誤って示偏が書かれることが多くなる。法華義疏では偏に「禾」を書いている。江戸版本では示偏が圧倒的、衣偏の使用例がみつからないほど。漱石は示偏を書いている。法輪寺切は示偏だとしてもおかしい字体。  
【判】偏の縦線は唐代まではまっすぐに書き、左に流すもの

ではなかったようだ。左に流している例が確認できるのは北宋。日本でも上代ではまっすぐに書いている。康熙字典はまっすぐだが、現代中国の印刷字体は左に流している。日本の印刷字体ではまっすぐなと左にながす例が半々くらいだった。文部省活字も当用漢字表も左に流している。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
元暦萬葉④	女消息往来	刀5								○		平安・法輪寺切
判												
元暦萬葉①	節用	刀5								×		北宋・米帝
別												
元暦萬葉②	女大学	刀5			教科書<俗>							現代中国
利												
元暦萬葉①	節用	刀5										西周・利殷
券												
慈悲遺告	節用	刀6								×		干祿<通>
刻												
粘葉本朗詠	節用	刀6			教科書<俗>					○		現代中国

【別】古代の字を見ると偏は「冂一口」で、馬王堆まではその字体を書いている。九経字樣では偏が「冂一口」の字体を説文、「別」を隸省としている。  
【刻】説文篆文、五経文字、康熙字典の一画目は共に横線。智永千字文の行書、瑠玉集や粘葉本朗詠では3~4画の書き順

が現在とは逆。楷書もこのような書き順で書かれていたのかもしれない。智永千字文の行書は偏の最終2画が「冂」の最終2画のように上の方に書かれている。宋元以来俗字譜にもこのような異体字が見える。康熙字典の古文は根拠を確認できない。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
刷	サツ する はく はけ 教4常①		𠄎				刷	刷	
								刷	
刺	シ ささる さす そしる とげ 常①		𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	刺	刺
								刺	
制	セイ おさえる 教5常①		𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	制	制
								制	
到	トウ いたる 常①		𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	到	到
								到	
刹	セツ サツ セチ てら 新②		𠄎				刹	刹	刹
								刹	
								刹	
削	サク けずる 常①		𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	削	削	削
								削	
前	ゼン まえ さき すずむ 教2常①		𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	前	前	前
								前	
痔			𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	前	前	
								前	
								前	

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
刷	刷	刷	刷			刷	刷	刷		刷	刷	刷
刺	刺	刺										
刺	刺	刺	刺	刺	刺		刺	刺	刺	刺	刺	刺
制	制	制	制	制	制		制	制	制	制	制	制
到	到	到	到	到	到		到	到	到	到		到
刹	刹	刹	刹				刹					刹
削	削	削	削	削	削		削	削		削		削
前	前	前	前	前	前		前	前	前	前	前	前
痔							前					前
							前					前
							前					前

【刺】睡虎地秦簡や漢以降に書かれた字体を見るかぎり、説文篆文の字体は誤りなのではないか。  
 【刹】説文には未掲載。新附に「柱也。从刀、未詳。殺省聲。」とある。文部省活字では偏の「ホ」に点がついている。  
 【前】もとは「止」と「舟」を合わせた「𠄎」の字体らしい。

甲骨には「行(十字路の形)」のついたものもある。睡虎地秦簡には「𠄎」に「刀」が加わっている。「𠄎」に「刀」が加わり、「止」が略体になったものが「前」らしい。「止+舟+刀」の字体にさらに「刀」を加えて「𠄎」となった。説文には別に「𠄎」があり、その篆文は「止+舟+刀」の字体。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆家	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
則	ソク すなわち のっとなる のり 教5常①								江戸平縁序 王勃詩序
剌	テイ そる ①								大聖武
劍	ケン つるぎ 常①								王勃詩序
劍	人②								關玉集
劍									性靈集
劍									性靈集
剛	ゴウ かたい こわい つよい 常①								金剛場陀羅尼經
									金剛場陀羅尼經
									最澄 空海請来目録
									最澄 空海請来目録

【則】説文では「則(貝+刀)」の字体が正体とされており、漢代以降もその字体が書かれている。ところが権量銘に用いられている字体は「鼎+刀」である。始皇帝は度量衡の統一と文字(字体)の統一をしたといわれるが、まず度量衡の統一をして、後に文字(字体)の統一をしたのだろう。

【剌】南北朝期より古い使用例がみつからない。五経文字には説文篆文に対応する字体が「𠄎」部に掲載されている。【劍】「劍・劍・劍・劍・劍・劍・劍・劍」などの異体字がある。篇と傍の左右の位置がかわることはあるが、部品としては必ず「劍」が付き、もう一方の部品に「金」「刀」「刃」の3

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
則	則	則	則	則			則	則		則		則 現代中国
	剌	剌										
		剌										
		剌										
		剌										
剌	剌	剌	剌				剌					剌 現代中国
劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍 現代中国
劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍 現代中国
劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍 現代中国
劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍	劍 現代中国
剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛 現代中国
	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛 現代中国
	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛 現代中国
	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛 現代中国

種類がある。日本の平安時代初期に「金+刃」の字体が出現するが、これは「劍」を「金」と見間違えた誤字か、あるいは「金+刃」として新たに作られた会意文字であろう。「劍」の部分の現在のように書くようになったのは中国では宋代、日本では鎌倉時代からのようだ。

【剛】最澄が、旁を「寸」とする字体を書いている。空海も灌頂記でこの字体を書き、後に藤原忠親もこの字体を書いている。これは中国には例のない異体字である。現代中国の字体には偶然かもしれないが古代文字の字体を生かされている。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
劑	ザイ 常①								東大寺獻物帳
劑									空海 三十帖家子
剝	ハク・ホク はかま・とる・ はがれる・は ぐ・はげる・ むく 常①								豐替指歸
剝									
剖	ボウ さく わかれる 常①								瑠玉集
剩	ジョウ あまつさえ あまり あまる 常①								瑠玉集
剩	人②								性靈集
副	フク そう そえる 教4剩①								
									劉碑造像記
									崔敬邕墓誌

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
												劑 現代中国
												剝 現代中国
												剖 現代中国
												剩 現代中国
												副 現代中国